





三日目追加 HO
マリー







大雨というよりは、豪雨と呼べる音で目を覚ました。
ここに来て三日目の朝。
小屋が心配になるほどの雨量だ。

朝なのに部屋の中が暗くて、ろうそくに火を灯した。
雨漏りしていないことを確認し、下へおり、昨晚多めに汲
んでおいた水を沸かす。
その間にスミレの部屋を見に行ったが、床にはなにも置か
れていなかった。
おそらく体は拭いてくれてるだろう。
——ご飯は、どうだろうか。
私を警戒していたから昨晚毒の話をしたけれど、私だって
スミレを信用しきっているわけではない。
けれど、ここで困っている人を見過ごしたら、魔女の使命
など到底こなせないと思ったから。

「スミレ、起きていますか？」

雨漏りの確認もしたかったため、ノックをして声をかけて
みたが返事がない。
眠っているのだろうか。
しばらくしたらまた来よう、そう思い、調理台へ戻った。

沸かしたお湯で体を拭く。
少しだけ、教会のお風呂が恋しくなった。





またワンピースで眠ってしまったので、半袖の寝衣に着替えたあと、調理台で洗濯して干した。

一階の雨漏りも確認したあと、切ったパンにジャムを塗って、ロフトへ戻る。

ロフトにはたくさんの本が置いてあった。

物語が書かれた小説から専門分野の本、日記など様々だ。かつての少女たちがここでどう過ごしたのか気になって、私は日記を手にとった。

『一日目。持ってきた本を読んで過ごした。』

『二日目。夜、獣の声が聞こえてきてこわい。本当にこの小屋で七日間も過ごさないといけないのかな。』

『三日目。魔女になる夢を見た。こわいと思っていた獣と仲良くなる夢だった。私たちは一緒に遊んで、眠って、ともに過ごした。』

『四日目。また魔女になる夢だ。昨日仲良くなった獣が襲ってきて、魔法で殺した。あっさりと、できてしまった。二日目に感じていた恐怖などもはや、なかった。』

ページをめくる手が止まる。



なぜだか続きを読むのがこわくなって、日記を閉じた。

次に、表紙も紙で出来たボロボロの本を手にとった。

表紙には『魔法について』と手書きで書かれている。

中も手書きで、誰かの手記であることがわかった。





この本によると、二種類の魔法を授かるらしい。
ひとつは、自然に干渉する魔法。
雨を降らせたり、火を起こしたりできる。
もうひとつは、生き物に干渉する魔法。
けがや病気に干渉したり、操ることができる力。
儀式中、自分が授かった魔法が頭の中に浮かんでくるそう
だ。
使い方や原理もそのとき頭に入り込んでくる。
そう書いてあるものの、どのような感覚なのかはいまいち
理解できなかった。



——あの日記のように、誰かを傷つける魔法を授かったら
どうすればいいんだろう。
魔法を扱う者はそれを使って人々を導く。
その魔法が必ずしも良い魔法であるとは限らない……？
使命に従った結果、人々を苦しめてしまうことにもなるの
だろうか。
だから、私たちをおそれられている？
先生はここまで話してくれなかった。

「流れ星に願えば、素敵な魔法を授かれるかな」

そんな子どもじみたことを考えてしまうほどには、魔女に
なることに対して不安を感じてしまった。

それからまた、別の本を手にする。





一人の少年が画家になるために奔走する小説で、スミレのことを思い出した。

欲しいものを聞かれて真っ先に画材をいうなんて、それほどまでに絵を描くことが好きなのだろうか。

私はずっと勉強ばかりしてきたから、そういう趣味のようなものはなかった。

どんな絵を描くのかな。

風景？人物？抽象画？

描いた絵を見てみたいと思ったけど、扉を開けてくれない彼にその願いを伝えてもいいのだろうか。

しばらく小説を読み、お昼になるころ下へおりた。

